

物語内容の類型論

—ツヴェタン・トドロフによる幻想文学のテーマ研究と

その汎用化の可能性—

西村 智

What Narrative Is About: Tzvetan Todorov's Typological Study of the Themes of the Fantastic and the Possibility of Its Generalized Use

Satoshi NISHIMURA

Abstract

One of the most challenging problems for narrative scholars would be that of what narrative is about. This article focuses on Tzvetan Todorov's thematic theory of the fantastic as a vital clue to the problem, illustrating its implications for a typological approach to narrative themes in general.

キーワード：物語、物語論、物語内容、ツヴェタン・トドロフ、幻想文学

Key words: narrative, narratology, narrative themes, Tzvetan Todorov, fantastic literature

「物語論」は、文字通り物語を対象とする研究を指す用語であるが、これについてジェラルド・ジュネット（Gérard Genette）は次のように述べている。

現代の物語分析は（プロットとともに）物語内容に関わる研究で始まったが、それは物語内容を（可能な限り）それ自体として扱い、その語り方にはあまり関心を寄せてこなかったのである…。さらに言えば、研究の方向性が二つに分かれたのは、つい最近のことである…。したがって、一見する限り、物語論には二つの種類があっという間に思われる…。

しかし実際はどうかというと、物語内容の分析に携わる文法、論理学、そして記号論は、これまで「物語論」という術語で称されることをおおよそ主張してこなかったものであり、そういうわけでこの術語は、専ら物語様式の分析を指すものに（暫定的に？）とどまっているのである。こうした限定は私には概ね妥当であるように思われる。というのは、物語の唯一の固有性はその様式にあるのであってその内容にあるのではなく、内容の方は演劇や図像など他の「表現」にも等しく適合することができるからである。実際、「物語的な内容」なるものはありはしない。あるのはいかなる表現様式にも受け入れられる一連の行為や出来事であり…私たちがそれらを物語的と呼ぶのは、た

またま物語による表現の中でそれらに出会うからにすぎないのである。(15-17)

ここで問題となっているのは、物語内容の研究に「物語論」という語を使用することが適切かどうかというよりは、むしろそれが「物語研究」としてそもそも成立するかどうかということである。というのも、物語を研究対象としていても、主としてその内容やテーマに関わるのであれば、それは厳密には「物語」の研究ではなく、物語の形で表現された「内容」や「テーマ」の研究と見なされるからである。すなわち、問われているのはその方法論ではなく、「物語内容」という研究対象それ自体なのである。

物語研究にとって内容やテーマといった側面が厄介なのは、要するに研究対象としてのその境界が表現様式面に比べて不明瞭であるからに他ならない。何であれ物語の語る内容は、確かに物語のみが表現できるものであるというわけではない。それだけでなく、物語は何でも語ることができ、何を語ってもいいのであり、その意味においてもジュネットの言うように物語的な内容や物語に固有の内容というものは存在しない。一口に「物語内容」と呼ばれる対象はこのように漠としていて、一見したところではおよそ捕らえどころのないものである。

しかしその一方で、理屈の上ではなく実際の見地からは、何を語るかは必ずしも完全に自由であるというわけではなく、少なくともその程度に物語内容にも制限があるとは言える。そうした制限の要因となりうるのは、主に受容側の期待や反応である。社会言語学者のウィリアム・ラボフ (William Labov) は、話し上手であることを、聞き手に「だから何？」と決して言わせないことであると見なしている (366) ¹ が、これは当然、どういう語り方をするかという話術の問題だけではなく、何を語るかという内容の選択の問題でもある。語り手がどのように語ろうとも聞き手に「だから何？」と言わせてしまうような物語は必ず存在するはずであり、その類の物語は、語る価値や必要がないものとしてそもそも語られないかもしれないのである。したがって、物語に固有の内容は何なのかを問うことは無意味だとしても、物語に適した内容は何なのかを問うことは的外れではない。もちろん、この問いに過不足なく答えることが可能かどうかは別の話であるが、少なくとも「ない」や「何でも」がその答えではない。例えば、ディケンズの『大いなる遺産』についての論考の中で、ピーター・ブルックス (Peter Brooks) はこう述べている—「逸脱は、人生が『語るに値する』ものであるための必要条件である。正常な状態というのは面白味や活気、そして物語られる見込みに欠けるのである」 (139)。波乱万丈の人生を送るピップは物語の主人公たるにふさわしいが、平凡な日々の暮らしに満足しているジョーやビディは、少なくともディケンズの世界では、せいぜい端役にとどまるのである。これが特殊な例でない限り、日常的なことや当たり前のことを何らかの形で「異化」² するような内容を持った物語は、多かれ少なかれ語るに値するものであると言えそうである。

また、特に文学的物語の場合、慣習的なジャンル区分—例えば、「自伝小説」や「恋愛小説」などが物語内容に類型的境界があることをすでに示しており、何らかの形でこれを突き詰めることによって物語一般の内容の問題に展望を開こうとすることは方法論的にも妥当であると思われる。以下では、こうした方向で最も成功していると思わ

れる研究の一つであるツヴェタン・トドロフ (Tzvetan Todorov) の幻想文学のテーマ論に注目するとともに、示唆されるにとどまっているその汎用可能性の問題にいくつかの具体例を通じて光を当てたい。

まず幻想文学についてであるが、このジャンルに属する物語がその内容に必ず含んでいるのは、言うまでもなく超自然的な—あるいはそう見える—要素である。トドロフはそうした要素を、「共存」および「対立」という相互関係性の観点から大きく二つのテーマ類型に分類する。一つは「自己」のテーマ類型、もう一つは「他者」のテーマ類型である。

第一の自己のテーマ類型に属する超自然的要素には、「変身」、そして「魔神や、魔法使いの王女のような超自然的存在の登場、およびそうした存在が人間の運命に及ぼす力」がある (109)。これらに共通する原理は「物質と精神との間の境界の脆弱性」であり、「この原理がいくつかの基本的テーマを派生させている。すなわち、特殊な因果律である汎決定論、人格分裂、主体と客体との間の境界の消失、そして最後に、時空間の変容である」(120)。これらのテーマが等しく関わっているのは、「世界との相互作用ではなく世界の知覚」であり、そうした知覚が幻想文学において示す世界は、薬物使用者や精神病患者、そして幼児の世界とも相通じるものであるという (120)。換言すれば、一部の幻想文学においては、特殊な様態の自己世界があたかも物理的世界であるかのように描かれているのである。

以上の相互共存的な諸テーマから成る類型に対して、それらとは共存しない諸テーマから成る第二の類型がある。他者のテーマ類型である。ここに属するのは、要するに性的欲望に関する諸テーマであり、幻想文学ではこれらもまた往々にして常軌を逸した特殊な形態で表現される。例えば、「悪魔」は性的衝動を掻き立てる力の擬人化であり (127-28)、「残虐行為と暴力」、および「死、死後の生命、屍、吸血行為」(138)などは、性的行為や性的対象の形を変えた表れである。

以上のようにトドロフは幻想文学における数々のテーマを二つに分類し、一方を自己のテーマ、他方を他者のテーマと呼ぶが、ここで強調されなければならないのは、両者が対立関係にあるということである。このことから分かるように、幻想文学の個々の作品におけるテーマの表れ方には三通りの場合があるのである。すなわち、自己のテーマが中心となる場合—モーパッサンの「誰ぞ知る？」など—、他者のテーマが中心となる場合—M. G. ルイスの『マンク』など—、そしてこれら二つのテーマの間の対立が中心となる場合—バルザックの『ルイ・ランベール』など—である。

さらに注目に値するのは、こうした諸テーマの分類と分布が幻想文学というジャンルに固有のものではないということである。トドロフによれば、「次のように仮定することは合理的である。すなわち、幻想文学が語ることは、文学一般が語ることに質的に異なるものではないが、程度において違いがあり、これが幻想文学では最高度に達しているのである。…こう仮定することで、私たちは二つの有益な指針を手になることになる。まず、幻想テーマの研究は文学一般のテーマの研究と連続的な繋がりがあるということ、そして極端さや過剰さが幻想文学の規範であるということの二つである」(93)。この二番目の指針において示されているジャンル上の特異性を差し引きながら、次に幻想文学と文学一般とのテーマ論的連関性を例示したい。

まず自己のテーマであるが、これは言うまでもなく文学一般においても頻出する、主要なテーマ類型の一つである。ただし、非幻想的な物語の場合、一般的に言って精神的世界と物理的世界との間の境界は侵犯されざる確固たるものとして措定されており、したがってそこでは、自己のテーマ類型に属すると言えるものは、他者や外界からの孤立ないし隔絶という形を取って表れることが多い。ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の「代書人バートルビー」(“Bartleby the Scrivener”) は、その明快な一例である。

「代書人バートルビー」は、表面的には一人の孤独な男の物語である。その男すなわちバートルビーは、ウォール街のとある法律事務所で写字の仕事をしているが、彼の雇い主である語り手がやがて気づくように、そこを住み処としてもいる。

そう、と私は思った、バートルビーがここを住まいとし、独居生活を我が物にしていることはどう見ても明らかである。何という痛ましい寄る辺なさや孤独がここに表れていることか！次いですぐに私の心をよぎったのはそんな思いだった。彼の貧しさも甚だしいものだが、その寂しさときたら何とも言い表し難い！考えてみて欲しい。日曜日になると、ウォール街はペトラのように廃墟と化してしまう。しかも毎日、夜になれば、そこには人っ子一人いなくなる。このビルだって、平日こそ仕事に勤しむ活気に溢れているが、日暮れになれば空虚さだけが響き渡り、日曜日には朝から晩まで誰も寄りつかない。そんな場所を、バートルビーは自分の住み処としているのである。至る所人々で混雑しているかと思ったらやがて誰もいなくなつて寂れてしまうのをただ一人眺める男—カルタゴの荒墟で物思いに沈む、罪のない変わり果てた姿のマリウスを髣髴させるではないか！（109-10）

しかし裏を返せば、これは自分だけの世界を持つ男が、それを最後まで徹底して守り抜くという物語であるとも言える。こうしたテーマに関連して、この物語には容易に気づくことのできる二つの主要なモチーフがある。一つは、何かを頼まれた時に彼が繰り返す「ご遠慮させていただきます」という慇懃な断りのせりふである。これにより、彼は自分の世界に他者が近づくことを絶えず拒否している。もう一つは「壁」—事務所の外に見える壁、あるいは彼が最後に収容される刑務所の中庭を囲む壁—である。こうした壁は、その向こう側にある広い世界から彼の世界を守っている。そしてその世界の中で彼は充足し、その状態を保ったまま一人死んでゆくのである。

「代書人バートルビー」には異性（女性）は登場せず、同性との間も含めて他者のテーマは存在しない。一方、異性との関わりがあっても自己のテーマで一貫している物語も多数ある。その一つが、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の『ダロウェイ夫人』(Mrs. Dalloway) におけるセプティマスの物語である。

セプティマスにはルクレッツィアという名の妻がいるが、彼は彼女を邪魔者扱いしており、彼を苛む戦争神経症の影響もあって、二人の間には意思疎通や相互理解がほとんど成立していない。それだけでなく、セプティマスの世界は、常に多かれ少なかれ外界から遊離した状態にある。例えば、妻とリージェント公園を散歩している時、クリケット用の柱を運んでいる少年たちに目を向けるよう彼女に促されると、彼は次のように反

応ずる。

見よ、と見えざるものが彼に命じた、その声は、今、語りかけてくる、彼に、人類の中で最も偉大な存在、最近まで生から死に送られていたセプティマスに、社会を再興するために復活した救世主に、ベッドカバーのように、あるいは太陽によってのみ打撃を与えられる雪化粧のように覆い被さり、永遠に荒らされることなく、永遠に苦悩する生贄、永劫の受難者に、語りかけてくる、しかし、そんなものは求めてはいない、彼はそう呻いて、手を一振りし、その永劫の苦悩、その永劫の孤独を払いのけた。(25)

セプティマスもパートルビーと同様、自分の世界に他の誰かが近づくことを許さず、ホームズ医師が診療の名目でそれを侵害しようとした時、彼は自死を選択する。彼の「分身」であるとされるダロウェイ夫人が、最後の内的独白で彼の死の意味を正しく理解し、これを代弁している。

彼女はかつてサーペンタイン池に一シリング投げ入れたことがあったが、それ以上のものは何もない。しかし彼はそれ以上のものを抛ってしまった。人々は生き続ける…。人々は…人々は老いてゆくだろう。一つ、大切なものがある。彼女自身の生活では、おしゃべりに取り巻かれ、すり減らされ、曖昧にされ、墮落や嘘やおしゃべりの中に毎日少しずつ滴るままにされている、大切なもの。これを彼は守り抜いた。死ぬことは抗うこと。死ぬことは通じ合おうと試みること。中心は不可解にも人々を避け、人々はそこに決して到達できないと感じる。近しさは遠のき、恍惚は薄れ、人は孤立する。死の中には抱擁がある。(184)

セプティマスは、ウルフの作品に登場する人物の中では、ダロウェイ夫人を除けば『灯台へ』のラムジー夫人に最も近いと言える。ラムジー夫人は、彼女を知る人たちにとって多かれ少なかれ不可解で理解し難い存在であるが、それは彼女の世界が他者を寄せつけない自己のテーマで貫かれているからに他ならない。そして彼女もまた、突然の死によってその世界を永遠に自分だけのものとするのである。

以上のような自己のテーマの物語はもちろん他にも数限りなく存在するが、おそらくこれを数において凌駕すると思われるのが他者のテーマを扱う物語である。もっとも、純粹にこのテーマのみを体現する作品となると、幾らか限定されるかもしれない。そうした物語の一つとして、例えばトマス・ハーディ (Thomas Hardy) の『ダーバヴィル家のテス』 (*Tess of the d'Urbervilles*) を挙げることができる。

『ダーバヴィル家のテス』は、一言で言えば、貧しい家の一人の娘が幸福を求めて彷徨する物語である。彼女はアレック、そしてエンジェルという二人の男と関わりを持つが、彼らの身勝手さに翻弄され、ついにはアレックを殺害した罪で処刑される。こうした彼女の運命について、語り手は彼女がアレックに最初に出会った時点で予告的に次のように述べている。

適切な判断によって物事を計画しても、時を得ずに実行されるなら、呼んでも待ち人はめったに来ず、愛すべき人が愛すべき時と一致することもほとんどない。母なる自然は哀れな被造物に、見れば幸せになれる時に「見てごらん！」とはめったに言ってくれず、あるいは誰かが「どこ？」と叫んでも、「ここ」と答えてくれることもほとんどなく、この隠れん坊は結局、疲れて飽き飽きするだけの遊びになってしまうのである。いつか人類の進歩が最頂点に達した時、こうした行き違いは、いま私たちを翻弄しているものよりも洗練された直観や、社会的仕組みのもっと緻密な相互作用によって、正されるのだろうか、そう私たちは思うかもしれない。しかしそのような完全性は、予測できはしないし、可能だと考えることさえできないのである。今のこの場合も、数知れない多くの場合と同様、ある完全体の二つの片方は時を得て相見えたのではなく、失われた一方は、一人で地上をさまよい、手遅れになるまで愚かにも気づくことなく待ち続けていた、そう言えば十分である。そのような不手際な延引から、不安、失望、動揺、破局、そして摩訶不思議な運命が生じたのである。(60)

テスはバートルビーやセプティマス、あるいはラムジー夫人のように確固とした自分の世界を持ってこれを生き抜こうとする人物ではなく、生涯を通じて他者との関係に身を任せている。しかし彼女の思いは叶えられることのないまま、死によって強制的に打ち切られるのである。

すでに指摘したように『ダーバヴィル家のテス』は他者のテーマを一貫して扱う物語であるが、このテーマを扱ってはいても『ダーバヴィル家のテス』のような物語とは区別されるべきものもある。自己のテーマとの葛藤を扱う物語がそれである。シャーウッド・アンダスン (Sherwood Anderson) の『ワインズバーグ、オハイオ』(Winesburg, Ohio) の中の一篇、「孤独」(“Loneliness”) はその典型例の一つであると言える。

そのタイトルが示唆するように、「孤独」はある程度まで「代書人バートルビー」と類似した物語である。これは象徴的な面でもそうであると言える。というのも、「代書人バートルビー」が「壁」の物語であるとすれば、「孤独」は、語り手が言うように、「ある男の物語というよりは、ある部屋の物語」(168) だからである。この「部屋」は、初めは主人公イーノックの仲間たちが集う場所であったが、社交下手の彼はやがて鍵を掛けてそこに一人閉じ籠もり、その閉鎖された空間に彼独自の世界を築き上げる。

活発な想像力を行使して、彼は、実際に話をしたり、生身の人々に対しては説明することのできなかったことを説明したりすることのできるような、自分だけの仲間たちをこしらえ始めた。彼の部屋には、彼もその一員として、自分の番になれば自分の言葉を発することのできる、数々の男女の霊が住みつき始めた。(170)

ところがその後、イーノックの物語には「代書人バートルビー」には見られなかった出来事が起こる。結婚である。「彼は寂しくなって、現実存在する生身の人間に自分の手で触れたいと始めた」(171)からである。とはいえ、イーノックの結婚生活は長続きしない。「彼自身がそれにピリオドを打ったのである」(172)。この時点で、彼の物語の続きは大方予想できるものとなる。同様のことが繰り返されるのではないと思われるのである。果たして、彼は以前のように再び部屋に籠もり、自己の世界に浸り始める。しかしバートルビーと異なり、彼はやはりそうした世界に浸りきることはできない。しばらくして一人の生身の女が彼の部屋を訪れるようになるが、この時の自分について彼はこう述懐する―「俺はあの女を欲しいと思ったが、同時に終始、欲しくないとも思っていたんだ」(176)。彼は結局、女を追いついてしまうが、結果として彼に残されるものは孤独である。しかしこの孤独は、バートルビーの場合とは違う単に何もない空虚な世界である。イーノック自身が言うには、「女が扉を開けて出ていくと、部屋にいた生命のすべてが女について出ていった。あの女が俺の仲間をみんな連れ去ったんだ。みんな彼女の後について、扉の向こうに行っちゃったよ。…俺は一人だ、ここでただ一人きりだ…。俺の部屋には温もりと触れ合いがあったのに、今の俺は完全に一人きりだよ」(177-78)。

これと同様の葛藤が、ハーディの『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)を特徴づけている。このことは、この小説が「肉体と精神との間に繰り広げられた激しい戦い」についてであるという、序文における作者自身の指摘(xxii)からも明らかである。小説の開始後まもなく、主人公ジュードは学都クライストミンスターに強い憧れを抱き、入学を夢見るようになる。そのせいで、彼はしばしば「精神の飛躍」に陥り、その間、「自分の肉体的状況から完全に遊離して」しまう(15)。しかしほどなく、「彼の生涯で忘れられない日」となるある土曜日(25)、こうしたクライストミンスターへの思いで満たされた彼の世界を揺るがす出来事が起こる。アラベラとの出会いである。彼女は屠殺した豚の性器をジュードに投げつけ、彼の気を引こうとする。

「よし、クライストミンスターを僕の母校にしよう。僕がその愛しき息子になれば、クライストミンスターだって大喜びするだろう。」

こうした将来の計画にあれこれと深く没頭しているうちにジュードの足は歩調を緩め、やがて彼はじっと立ち止まって、あたかも将来が幻灯機によってそこに映し出されているかのように地面を眺めた。すると突然、何かが彼の耳元に鋭くぶつかり、そして彼は、柔らかに冷たいものが彼に投げつけられ、足元に落ちたことに気づいた。

一瞥でそれが何か分かった一肉の一片、去勢豚の一物だった…。(27)

これはジュードの物語に他者のテーマを導入する象徴的な場面であると同時に、その後の彼の生涯を通じて続くことになる、自己のテーマとの葛藤の開始を告げてみいるのである。

「代書人バートルビー」とセプティマスの物語の場合と同様、「孤独」と『日陰者ジュード』の場合もまた、文学史や影響関係の観点からは両者間に何ら接点はないが、物

語内容の類型論的視点からは、単なる偶然とは思われない類似点が見出せるのである。また同様の観点から「代書人バートルビー」と「孤独」とを、あるいは『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』とを比べた場合、それぞれ互いに表面的ないし部分的に似通ってはいても本質的な部分で異なっていると言える。こうした比較対照は、他の多くの物語作品の間でも同様に意味あるものとして成立するはずである。

注

1. この問題と物語論との関係については、Culler 183-86 参照。
2. 「異化」については、Shklovsky 5-6 参照。

引用文献

- Anderson, Sherwood. "Loneliness." In *Winesburg, Ohio*. New York: Viking Press, 1960. 167-78.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1992.
- Culler, Jonathan. *The Pursuit of Signs: Semiotics, Literature, Deconstruction*. Ithaca: Cornell University Press, 1983.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse Revisited*. Trans. Jane E. Lewin. Ithaca: Cornell University Press, 1988.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. New Wessex Edition. London: Macmillan, 1990.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. New Wessex Edition. London: Macmillan, 1990.
- Labov, William. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1972.
- Melville, Herman. "Bartleby the Scrivener." In *Selected Tales and Poems*. Ed. Richard Chase. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1950. 92-131.
- Shklovsky, Viktor. *Theory of Prose*. Trans. Benjamin Sher. Elmwood Park, Illinois: Dalkey Archive Press, 1990.
- Todorov, Tzvetan. *The Fantastic: A Structural Approach to a Literary Genre*. Trans. Richard Howard. Ithaca: Cornell University Press, 1975.
- Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. Harvest / HBJ Edition. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, 1990.